徳島新聞　平成２７年１月２３日（金）

手術技術向上へ新施設

徳島大病院 西日本の大学で初

徳島大病院（徳島市蔵本町２）は、遺体を用いた手術の技術習得と研究開発を行う新施設「クリニカルアナトミーラボ（ＣＡＬ）」を総合研究棟１階に設置した。遺体保管にホルマリンを使わず、冷凍庫を備えることで生体に近い状態で解剖したり手術技術を研究したりできる。西日本の大学では初めての施設となる。

ＣＡＬには遺体保管専用の冷蔵庫（２体分）１台、冷凍庫（５体分）４台を設置。遺族から了承を得た遺体を冷凍保管し、研究の際に解凍する。

これまでは提供された遺体をホルマリンで保管していたが、皮膚や血管などが固くなったりもろくなったりしていた。冷凍保管の場合は、生身の体とほぼ同じ状態で手術技術の研究などに取り組むことができる。

遺体は１年ほど保管が可能。手術台や腹腔鏡装置、ＣＴ（コンピューター断層撮影）室などもあり、同病院の医師や歯科医師が利用する。

昨年11月に運用が始まり、これまでに腎摘出手術や椎間板ヘルニア手術などの12例の研究が行われた。設備費は約１億８千万円。

22日に同病院で記者会見した安井夏生院長は「安全に手術技術が学べるとともに、新たな治療法の研究開発にもつながる」と話した。（矢田諭史）